

文化情報誌

たわわ

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。

2022
No. 117



photo by たーちゃん

笹本兄妹



子どもの頃から既に将来の姿を予見させていたこの三人は、長男・恭平さんがドラム、次男・健介さんがギター、そして、長女・真由さんがマイクをサクスの持ち替え、2016年に正式に「笹本兄妹」としてバンドを結成しました。

笹本兄妹のライブは基本的に兄妹だけの三人編成です。

以前は実験的に他の人に入ってもらったりしたこともあったそうですが、ライブでは即興性を重視したジャズ寄りの演奏をすることが多く、その場で会話をするような演奏には三人だけの編成がしっくりきたのだそうです。

例えば、ベースが入ると楽曲として音の厚みが出るけれども、兄妹ならではの独特な雰囲気が薄れてしまいます。そのため、ベースがなくても、音色や弾き方で工夫をしたことで演奏に厚みを持たせることができ、唯一無二のグルーブが生まれました。

和気あいあいと笑いながら、時には言い合いながら、兄妹だからこそ作り出せる演奏と空気感が笹本兄妹の強みです。



ギター・健介さん

そんな笹本兄妹にとって両親はとても偉大な存在。

幼い頃に「本当にやりたいことをひとつだけ言ってごらん」と言われ、三人とも何がやりたいのだろうと考えた結果が音楽だったそうです。

「父も母も、私たちが生まれた時から童謡をたくさん歌ってくれていたそうなので、きっとそれが影響しています(笑)」と真由さん。

「好きなことは誰に言われなくても自分からどんどん勉強して頑張れる。できるところまででいいからやってみたらいい！応援するよ！」という両親の思いがあって、三人とも音大まで進むことができました」と健介さん。それぞれが両親への感謝を口にしていました。



サクソ・真由さん

今の三人の活動はライブが中心です。

一枚目のアルバムを作り始め、ライブ活動で全国や世界を回ろうとしていた矢先の2020年、新型コロナウイルス感染症がまん延してしまいました。

恭平さんは別の仕事でヨーロッパツアーを終えたところで、羽田に着いたら全てがキャンセルになっていたことにくらしたそうです。ライブ活動ができない間は、オンラインレッスンや配信ライブなど、今まではやっていなかったようなことをいくつも経験しました。苦境ではありましたが、ドラム一本でなんでも乗り切ってやるという覚悟が大事だと

再認識して、自信もついたらと笑います。

「今の状況になって学んだこともたくさんあります。コロナが広がっている間にCDを送ってほしいと言ってくさる人が何人もいて、その人たちが地域で笹本兄妹を広めてくれたんです。こういう状況になって改めて、繋がり大切さをすごく感じます」と恭平さん。

笹本兄妹を取り巻く人たちにいつも感謝をして演奏活動を続けているのだと、繰り返し話してくれました。



ドラム・恭平さん

生まれ育った平塚については、三人とも「温かい人が多い。温かいまち」と言います。

真由さんが「私たちは港地区で育ちました。地域の行事も盛んなところで、お祭りでは子ども会パレードで踊ったり、夏はボードウォーク辺りの早朝海岸清掃で潮風を感じたりしました」と思い出を語ると、「かつて文化祭でバンドを組んで盛り上げた母校・太洋中学校の生き方講座で後輩達に夢を諦めないでとお話させていただいたりしました」と恭平さん。

「大切な思い出をたくさん作らせてもらって感謝しています。いつか地域に恩返しをしたいです」と健介さんは、地域の飲食店でのライブのことなども楽し気に話してくれました。恭平さんは「せっかく新しいホールができたから平塚のアーティストをもっとプッシュしてほしい。気さくなアーティストも多くてみんな優しいし、エネルギーに爆発するような若い人たちのコミュニティがあると平塚はもっともっと面白くなると思います」と語り、「市内に住んでるアーティストのコミュニティをSNSとかベースにして立ち上げたりできるんじゃないかな」などと、アイデアを出して盛り上がりました。

兄妹ならではのきさくなやりとりの中で、気が付けばインタビューは二時間近く。

三人の明るさ、優しさ、力強さの全てが重なり合っていて、三人ならではの音楽が作られていくのだと納得できる時間でした。



photo by たーちゃん

【笹本兄妹】

湘南発のリアル兄妹によるさわやか系ハードフュージョンバンド。リーダーは次男。生の演奏の価値を大切にしながら、2020年7月7日に初のEP「diffraction」をTRANSIST RECORDSよりリリース。年間30本以上のステージを全国で行い各地に熱心なファンを持つ。

三人とも同じ音楽大学を卒業。

11月3日に平塚市中央公民館で開催される「平塚万博」に出演予定。

平塚万博 (HP)



笹本兄妹 (Twitter)



巡って学ぶ平塚学入門⑤

「すべての道は太山に通ず」

平塚からよく見える大山。大山へ向かう道は大山道と呼ばれ、市内にも数多く通じています。江戸時代に関東一円に大山講が組織され、夏山開山期間には各方面から白装束を着た導者が大山へ向かって歩いていきました。

市内を通る大山道で江戸時代に最も利用された道は、田村の渡しで相模川を渡る田村通大山道です。

男の神様である大山へ登ったら、女の神様である富士山か江ノ島弁財財天とセットでお参りするべきと考えられていました。そのため、大山と江ノ島を結ぶ最短ルートである田村通大山道が多く利用されたのです。

昭和2年に小田急線伊勢原駅が開業するまでは、大山へ向かう際の最寄り駅は東海道線平塚駅でした。明治20年



田村十字路の大山道標。正面に「右大山道」、右面に「ふじさわえのしま かまくらみち」とあり。江ノ島方面へ向かう参詣者のために建立された。

に開業すると、平塚駅周辺は大山へ向かう人で賑わいました。これ以降、八幡大門を通り、平塚八幡宮の前で厚木道と分かれ、追分まで秦野道と分かれて伊勢原へ向かう道が大山へのメインルートになりました。

現在でも、大山道として利用されていたことが分かるものが市内各地に残されています。それは、江戸時代中期から昭和初期にかけて建てられた、約60基の道標です。

その行き先を見ると、金目が29例、大山が26例、田村が15例で、2番目と3番目に多い行き先です。このことから、江戸時代に庶民の社寺参詣が盛んであったこと、かつ田村が多いことから田村通大山道が盛んに利用されたことがわかります。

これから大山は紅葉シーズン。たまには石造物にも注目しながら大山道を使って大山へ向かってみると、また異なった楽しみ方ができるかもしれません。

(平塚市博物館学芸員)



中原本枝神社の道標。正面に「庚申供養塔 大山道」、右面に「ひらつか おおいそ道」、左面に「左 ステーション道」とある。

高山市・平塚市友好都市提携40周年記念

高山市は、岐阜県の北部、飛騨地方の中央に位置しています。面積は2,177.61km²と市として日本一広く、その広さは東京都の面積に匹敵します。また、面積の約92.1%は森林で占められ、山や川、溪谷など自然に恵まれており、美しい四季の変化を感じられます。

そんな自然豊かな岐阜県高山市と平塚市は今年、友好都市提携40周年を迎えます。

平塚市と高山市の出会いは古く、今から900年ほど前に平塚八幡宮の御分霊が高山市山口町の櫻ヶ岡八幡神社に祀られた頃にさかのぼります。昭和57年に平塚市で市制50周年事業として、友好都市の相手方を市民に募ったところ高山市が選ばれ、昭和57年10月22日に提携を結びました。



今年の友好都市3市の七夕飾り（一歩右が高山市）

平塚市と高山市との交流は、七夕まつりでの郷土芸能披露、友好都市七夕飾りの掲出のほか、児童との交流や市民ツアーなど幅広く行っています。今年は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため湘南ひらつか七夕まつりへの高山市民ツアー

ーは叶いませんでしたが、友好都市3市（高山市・花巻市・伊豆市）の七夕飾りは「第70回七夕飾りコンクール（中心街の部）」において準入選を果たしました。

また今年は友好都市提携40周年を記念して、今月9・10日に開催される秋の高山祭にあわせて平塚市民ツアーが高山市を訪れ、市内見学のほか記念式典に出席します。また、11月には高山市民ツアーが平塚市を訪問する予定です。

なかなか遠出ができない方は、11月に市内スーパーで友好都市3市の物産フェアを予定しているので、そこで高山市の物産を手に入れることができます。詳しくは11月4日発行の広報ひらつかをご確認ください。ぜひ、高山市の“うまいもん”に舌鼓を打ち、高山市に触れる機会にしてみませんか。



平塚市民ツアーでも堪能した高山祭（宵祭） 写真提供：高山市



市内スーパーでの物産フェアの様子（令和3年度）

復曲『大磯』

観世流能楽師 加藤真悟

たわわ111号でご紹介した湘南ひらつか能狂言実行委員会が、本年度は地元縁の5曲のうち最後の復曲『大磯』に挑みます。能楽師の加藤先生の説明であらすじを知り、その魅力に触れてみてください。

『大磯』はもともと、江戸時代、素謡の曲として作られたものらしく、作者は俳人大淀三千風の可能性が指摘されています。大淀三千風は元禄九年頃大磯に嶋立庵（しぎたつあん）を結び西行堂を建立したといわれ、謡曲「嶋立沢」を刊行しています。

『大磯』の中に出てくる庵は、嶋立庵の可能性あります。

登場人物は、ワキの旅僧と前シテの庵の主、後シテに虎の霊がでてきます。

物語のあらすじは、都の僧が陸奥に旅しますが、あまりに雪深く先々都へ上ろうと筑波山の雪間を眺めながら、大磯まで辿り着きます。日暮れになり、道を急ごうとすると、俄かに雪が降ってきます。見れば火の光が漏れる庵がみえます。そこで宿を取ろうとすると、庵のなかから身を嘆く女の声が聞こえます。

「げに詫び人の世渡る程。もの憂きことはよもあらじ。悲しみ多き秋も暮れ。月日の数もうつりやすく。厳冬の寒き夜半の空。あら浅まし身命やな」

僧が一夜の宿を乞うと、女は気の晴れぬまま一度は断りますが、世捨て人と分かると庵の内に招き入れます。そして、僧に「今日は志す日にて候」と回向を願います。僧が誰を回向するのかと聞くと、「いにしえ此処に虎と申せし遊女の候ひしが、その跡を弔いて給わり候へ」と語り始め、虎の生い立ちから祐成との契りの深さ、頼朝が行った富士の巻狩りで祐成が敵討ちを果たした顛末までを語ります。祐成の名は残れども命は消え失せ、嘆きは尽きせぬと袖を濡らし、涙ながらに祐成を追慕し、「あとを弔いて」と、言ったかと思うと、庵ともども女も消え失せてしまいます。（中入）

僧は、草枕で一夜を過ごし、終夜御経読誦します。すると、虎の霊が「天の戸の明るく空かともえつるは積もれる雪の光なりけり」と、雪女さながらの姿で現れ、「一僧一宿の功力と云い、殊更読誦の御経にひかれて、南方無垢の世界に至る。あら有り難の御法やな」と、御経読誦を感謝します。「いざいざさらば終夜慰め申すべし」と、廻雪の袖を翻し舞を舞うと、やがて明け方の寺々の鐘が響き、夜明けの鳥の声が聞こえ、姿は夢。と消えてしまいます。

大磯はことに雪が多く降る土地柄ではありません。それなのに、雪と虎を重ねて提示した作品であるところが特徴です。

祐成が親の仇、工藤祐経を頼朝の富士の巻狩りで討ち、自ら果てたのは二十歳。この時、虎は十九歳という若さです。その後、虎は諸国の霊場を巡り、兄弟の菩提を弔い、やがて山下に庵を結び、享年六十三歳で生涯を閉じるまで、兄弟を供養する日々を過ごします。

男の性である敵討ちは何世代にもわたって引き継がれることがあります。雪は降り積もれば、目の前が白銀の世界となり、日常生活を一旦止めます。虎は母性からか、敵討ちの連鎖を止めるべく雪女として現れ、日常の思考を一旦止めて冷静に考える時間を与えて来ているかのように思える作品です。



前回公演『和田酒盛』の様子

『大磯』の上演は2023年冬を予定しています。発売前に広報ひらつかや平塚市まちづくり財団ホームページでご案内いたします。

平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。

発行 平塚市文化・交流課 | 〒254-8686 平塚市浅間町9-1

電話 0463-32-2235 FAX 0463-21-9756 E-mail bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp

令和4年(2022年)10月15日発行 右の2次元バーコードより文化情報誌「たわわ」へアクセスできます。

